

機関番号：18001

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2010

課題番号：20730415

研究課題名（和文） アタッチメント理論から捉えたニートの特異的な心理的特徴に関する実証的研究

研究課題名（英文） An empirical study for the links between adult attachment and the psychological variables in Japanese NEET (Not in Education, Employment or Training)

研究代表者

中尾 達馬 (NAKAO TATSUMA)

琉球大学・教育学部・准教授

研究者番号：40380662

研究成果の概要（和文）：本研究では、アタッチメント理論の視点から、ニートの「対人的問題」と「仕事への意識・態度」との関連を実証的に検討した。社会的ひきこもり経験のあるニート男性7名に対して面接調査を行った結果、次の2点が示唆された：(1)彼らは、母親の養育態度を、過保護であるが、ケア（e.g., 温かさ、共感）の要素は少ないと認知していた。(2)社会とのつながりが増える場面（e.g., 就職、進学）では、（家族内というよりも）家族外のアタッチメント関係（e.g., 友人、先生）が重要な役割を果たす可能性がある。

研究成果の概要（英文）：This study examined the links between adult attachment and the attitude toward working in Japanese NEET (Not in Education, Employment or Training). Participants were 7 Japanese NEET who experienced social withdrawal (all were male). Main results of the interview survey were as follows: (1) Participants recognized that the caregiving attitude of their mother was characterized by over-protection and less care elements (e.g., warmth, empathy). (2) It was important for adolescents in the transitional periods (e.g., seeking for employment, enrollment in the university) to get attachment relationships "outside" of family (e.g., peer, teacher).

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・社会心理学

キーワード：ニート、アタッチメント、社会的ひきこもり（細目表キーワード：社会問題）

## 1. 研究開始当初の背景

ニートとは、概ね、「15～34歳の若者の中で、学生でない未婚者でかつ働いておらず、求職行動もとっていない人」を指す（本田，2006）。そして、その数は約64万人（厚生労働省 労働力調査）とも85万人（内閣府 就

業構造基本調査）とも言われ、予防や介入を急務とする大きな社会問題となっていた。

今までに実施された調査からは、ニートの実態が徐々に明らかになりつつあった（文部科学省 ニートに関する実態調査、厚生労働省 ニートの状態にある若年者の実態および支援策に関する調査研究報告書）。

- (1)ニートは対人関係が苦手であり、対人関係や仕事に対して消極的・受動的である。
- (2)ニートは働く意欲がない者とされていたが、実は、何らかの職業経験を有している。
- (3)進学率は同世代の水準とほぼ同じであるが、中退や不登校など学校教育段階でつまづきを経験している者が多い。
- (4)「ひきこもり」や「精神科または心療内科で治療を受けた者」は、約半数である。
- (5)職歴のあるニートの家庭では、しつけが厳しい傾向が見られるが、一方では、子どもの進学や就職については、ほとんどの親が本人任せにしている。
- (6)進学時や就職時において、場当たりの選択や安易な選択を行っている場合が多い。

だが一方で、ニートは「働いていない」ということが共通するのみであり、実際には多種多様な若者が一括りにされた上で議論が進んでいるという等質性の問題が浮上してきた(本田, 2006: 図 1)。さらに、ニートの抱える対人的問題や仕事への意識・態度がそれぞれ個別に論じられており、確立された理論に基づいた両者を橋渡しするような実証的検討は、ほとんど行われていなかった。

そのため、抱えている問題が異なる不安定層(フリーターや失業者と非求職型を行き来する群)と不活発層(負の連鎖に巻き込まれている臨床的介入が必要な群)、そして中立層(教育機関での学び直しや留学準備中といった、今現在は働き始める必要がない群)における共通性および特異性が不明瞭になり、ニート概念の再考を促す研究者も現れ始めた(本田, 2006: 図 1)。

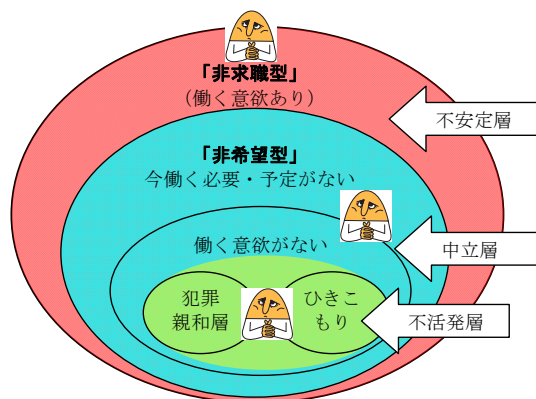


図 1 抱えている問題から見たニートの概念図(本田, 2006)

## 2. 研究の目的

そこで本研究では、図 1 の不活発層(社会的ひきこもり)に焦点を研究を展開していった。社会的ひきこもりとは、「20 代後半までに問題化し、6 ヶ月以上、自宅にひきこもって社会参加をしない状態が持続しており、ほかの精神障害がその第一の原因とは考えに

くいもの」(斎藤, 1998)と定義されている(以下ひきこもり)。そして、2010 年 7 月発表の内閣府調査によれば、ひきこもり者は 69.6 万人、ひきこもり親和群は 155 万人いると推測されている。

ひきこもり者は、自分の中に感じる「生きにくさ」と対峙しながら、「生き方」を模索している(石川, 2008)。だが、その心情や行動を、両親を含めたひきこもり経験のない者が理解することは必ずしも容易ではない(上山, 2001)。さらに、ひきこもり者の語りに対する心理学的研究は、ほとんど行われていなかった。

そこで本研究の第一の目的は、ひきこもり経験者を対象に、「これから先にやってみたいことや頑張ってみたいこと」などについて、個別面接を行い、その内容を明らかにすることで、ひきこもり経験者の心情や行動を理解するための手がかりを得ることであった。

また、ひきこもり問題には対人関係の問題が絡んでいると指摘されているにもかかわらず(田中, 2001)、アタッチメント理論の観点からは、実証的検討が行われていなかった。そのため、たとえば、「(ニートにおいては)人間関係回避傾向が、他者への依存や依頼心を低下させ、独力で就職への道を模索し、就職可能性を高める」(高橋・大里, 2006)といったアタッチメント理論の安全基地概念とは相容れない解釈が生じたりしていた。

そこで本研究の第二の目的は、ひきこもり経験者のアタッチメントスタイル、(アタッチメントスタイルに影響を与えるであろう)母親の養育態度に対する子どもの認知(金政, 2007)、および彼らの持つアタッチメント関係の機能について検討を行い、彼らに特異的な心理的特徴を明らかにすることであった。

本研究では、研究開始当初、ひきこもり経験者本人からだけでなく、ひきこもり経験者と接点のある人(e.g., 支援者)からも情報を集め、ひきこもり経験者に特異的な心理的特徴を包括的に検討する予定であった。そこで、ひきこもり支援者と当事者の面識は必ずしも高い場合だけではないという想定のもと、「面識があまりなくとも、他者のアタッチメントスタイルを認識することは可能なのか?」という問いをたて、大学・専門学校一年生 120 名(60 ペア)を対象に、アタッチメントスタイル尺度における「自己評定と他者評定の一致度の検討」や「そこでの不一致が適応(精神的健康や、大学環境への適応)へ及ぼす影響」について検討を行った。だが、面識があまりない場合には、アタッチメントスタイルにおける自己評定と他者評定との間には有意な関連が得られるが、その大きさは必ずしも大きいものではなかった。そのため、ひきこもり経験者本人に対する個別調査に焦点を絞り、研究を展開していった。

### 3. 研究の方法

調査対象 西嶋 (2009) は、社会的ひきこもりを「第一種ひきこもり」(部屋から一步も出ない群)、「第二種ひきこもり」(昼夜逆転型)、「第三種ひきこもり」(家からは出られるが、学校や仕事には行けない[社会参加できない、いわゆるニート状態])の3つに分類している。本研究では、調査自体は、西嶋 (2009) の定義における第三種ひきこもりの状態にある男性 10 名に対して実施した。そして、この内、斎藤 (1998) の定義に当てはまる経験を持つ者を「不活発層のニート(ひきこもり)」であると操作的に定義し、分析の対象とした。具体的には、男性 7 名 (M=27.6 歳、range=23-34、連続した最長のひきこもり期間=半年から 10 年、調査時、全員未就労) が分析の対象となった。

調査内容および手続き 調査は、調査対象者と初対面の段階で実施したのではなく、彼らが参加している NPO の活動に面接者も複数回参加し、両者が顔見知りになった後に実施した。なお、以下に述べる本調査は、元ニート者 1 名 (ひきこもり経験者、調査時は就労していた) に対して、予備調査を実施し、調査内容を洗練した後に実施した。

はじめに、調査趣旨を説明した後、調査同意書に署名を求めた (インフォームド・コンセントを行った)。その後、フェイスシートの項目について、質問を行った。

- ・年齢、性別、結婚の有無、家族構成、(最終) 学歴
- ・現在働いている場合には、どのくらいの期間働いているのか、平均月収はいくらか、今までの職歴
- ・無職状態の期間やひきこもり期間は、どのくらいか (年月)
- ・ひきこもり時の親への生活費の依存度はどうだったのか
- ・学校段階でのつまづき (中退、不登校など)
- ・精神科または心療内科での治療やカウンセリングの経験の有無

次に、以下の項目について個別面接 (構造面接) を行った。

- (1) これから先にやってみたいことや頑張ってみたいこと
- (2) 仕事や職場を選ぶ上で大切にしていること
- (3) 就職活動中、ひきこもり時、進学時に感じた不安、およびその時の他者への相談状況
- (4) ひきこもりになるきっかけ
- (5) ひきこもり状態から抜け出すきっかけ

個別面接終了後、以下の 4 種類の尺度への回答を求めた。なお、以下の (1) と (2) は 7 件法 (1=「全く当てはまらない」から 7=「非常によく当てはまる」)、(3) は 4 件法 (1=「全く当てはまらない」から 4=「非常によく当てはまる」)、(4) は自由記述回答であった。

- (1) 一般他者へのアタッチメントスタイル  
「親密な対人関係体験尺度  
(Experiences in Close Relationships inventory, Brennan, Clark, & Shaver, 1998) の一般他者版 (ECR-GO: 中尾・加藤, 2004: 30 項目) と「関係尺度  
(Relationship Questionnaire, Bartholomew & Horowitz, 1991) の一般他者版 (RQ-GO: 加藤訳, 1999: 5 項目) から構成されていた。
- (2) 母親へのアタッチメントスタイル 親への愛着尺度 (丹羽, 2005: 17 項目) と母親版 RQ (RQ-M: 加藤訳, 1999: 5 項目) を実施した。なお、これらの尺度では、アタッチメント対象を「母親」とした。
- (3) 母親の養育態度に対する子どもの認知 PBI (Parental Bonding Instrument, Parker, Tupling, & Brown, 1979, 長谷川・浦・田中訳, 1998: 25 項目) を実施した。
- (4) アタッチメント対象は誰か/アタッチメント関係の機能 WHOTO-R (Fralely & Davis, 1997, 中尾訳, 2007: 5 項目、項目例は表 6 参照) を用いた。

### 4. 研究成果

個別面接において得られた回答は、著者が KJ 法を用いて分析を行った。なお、以下の表の ( ) 内の数字は頻度である。

- (1) やってみたいこと/がんばってみたいこと (表 1) 多種多様であり、就職や経済的自立にのみ目が向いているわけではないことが示唆された。

表 1 これから先にやってみたいことやがんばってみたいこと<sup>1)</sup>

最初	就職して、収入を得て、経済的に自立したい(1)、 バイト→就職をして、親からの自立&英語が好きなので、勉強して海外に行ってみたい(1)、勉強に力を注いで、教師を目指したい(人と深く関わる職業に就きたい)(1)、現在、手伝っている園芸関係の仕事(1)、プログラミングの勉強がしたい(1)、自営業(1)、あったら、既に何かをやっている(1)、
最後	バイト (1)、彼女がほしい (1)、価値ある人生を送りたい (1)

<sup>1)</sup> 同じ質問を面接の最初と最後に 2 回行った。

- (2) 仕事/職場を選ぶ上で大切にしていること (表 2) 一人あたりの回答数は、1~2 であり、仕事や職場を選ぶ上で、多くのことを

求めているわけではなかった。また、仕事や職場を選ぶ上で、大切にしていることは多種多様であった (e. g., ひきこもり経験者の中には、接客業を希望する者もいれば、そうでない者もいた)。

表2 仕事や職場を選ぶ上で大切にしていること

**接近目標**(これだけは外せない): 人間関係が良好(2)、誰かと関わることができる仕事(接客業)(1)、ある程度の休み(1)、ある程度慣れたら、自分で考えて、仕事ができるような働き方(1)、生活できるだけの給料&自分の時間を作ることができる(1)、特になし(1)

**回避目標**(これだけはイヤ): 時間や仕事の振り分けが、ある程度きっちりしないとイヤ(1)、超ハードな勤務時間(1)、単純作業(やっていると、何かこうパンクしそうになる)(1)、非常に体育会系みたいなどころ(1)、言われた通りに何かをずっとやるのはイヤ(1)、接客業(1)、給料が安すぎる(1)、残業(1)仕事が終わってからの時間みずっと人間関係が続くのはきつい(1)

(3) 不安および相談相手 (表3) ピア(友人や恋人)が相談相手としてあまりあがらないことは、ひきこもり経験者の特徴なのかもしれない。

表3 就職活動・ひきこもり時・進学時の不安とその際の相談相手<sup>1)</sup>

就職活動中(N=5)	不安	仕事として何をさせられるんだろうという不安(1)、人が恐かった(1)、履歴書の空白期間への質問(1)、そんなに高くない(1)、特になし(1)
	相談相手	特になし(2)、親(1)、親やキャリアカウンセラー・ハローワークの担当(1)、友達(1)
ひきこもり時	不安	将来のことに対する不安(3)、将来のことに対する不安&自分に自信がないという悩み(1)、外と関わりがないから、単純にどうしたらいいのか分からない(1)、人に対する不安(1)、一人だけ取り残されていく感じ&普通に働くのは難しいかもというあきらめ(1)
	相談相手	いない(3)、親(2)、精神科医・カウンセラー(1)
進学時	不安	特になし(4)、勉強についていけるか(1)、人付き合い(1)
	相談相手	親(3)、いない(2)、高校の先生(1)

<sup>1)</sup> 「就職活動中」については、就職活動やアルバイト探しを行ったことのない2名を除いて分析を行った。

(4) ひきこもった理由・抜け出すきっかけ (表4) 先行研究同様 (e. g., 荻野・川北・工藤・高山, 2008)、ひきこもる理由は多種多様であることが示唆された。また、抜け出すきっかけの一因としては、環境の変化(支援団体との関わりを含む)が重要である可能性が示唆された。

ひきこもり経験者の語りの内容は、大学生のそれと大きな違いはないと考えられる。何か異常があるからひきこもるのではなく、普通の人が普通にひきこもっていることに、こ

の問題の難しさがあるのかもしれない。なお、ひきこもり経験者の仕事への態度については、アタッチメント理論の観点からは、不安時における相談相手としてピアがあがらないという基準的要素の側面における特徴を見出すことができた。だが、アタッチメントの個人差(個別的要素)における特徴については、今回の調査では、それを見出すことが困難であった。

Table 4 ひきこもった理由およびひきこもり状態(部屋や家から一步も出ない状態)を抜け出すきっかけ

ひきこもった理由	孤独感→人との付き合い方が分からなくなる→へこむ→ひきこもった(1)、漫画を読んで、ひきこもりというのがあることを知って(1)、こうするのが当たり前(e.g., 進学・勉強する)というのが、なぜしないといけないのか理解できなかった(1)、学校生活(集団生活)がきつかった(1)、友人関係が上手くいかなかった(1)、人が恐かった(1)、不登校(1)
抜け出すきっかけ	支援団体(3)、自分の中での危機感(このままではダメ)→支援団体(1)、親の理解・環境の変化[家に居づらくなった]・支援団体(1)、自分の中での焦り→生きていくという実感がわかった(1)、抜け出しているのだろうか(1)

(4) 一般他者や母親へのアタッチメント、母親の養育態度に対する子どもの認知 質問紙調査については、まず、先行研究に従い、一般他者へのアタッチメントスタイル、母親へのアタッチメントスタイル、PBIの尺度得点を算出した。そして、1サンプルのt検定を用いて、先行研究の尺度得点との差異を検討した(表5)。その結果、ひきこもり経験者は、親密性を回避する傾向があること、母親の養育態度を、過保護であるが、ケア(温かさ、共感、など)の要素は必ずしも多くないと認知していることの2点が示唆された。

表5 各尺度得点における先行研究と本研究の比較

(1) 一般他者へのアタッチメント				
ECR-GO	中尾・加藤 (2004)	本研究	p値	
見捨てられ不安	3.70	3.42		
親密性の回避	3.74	4.52	<1%	
RQ-GO	中尾・加藤 (2004)	本研究	p値	
自己観	-1.55	-3.86		
他者観	1.24	-1.00	<5%	
(2) 母親へのアタッチメント				
母親への愛着尺度	丹羽 (2005)	本研究	p値	
愛着不安	15.32	13.43		
愛着回避	27.80	29.86		
RQ-M	中尾・加藤 (2003)	本研究	p値	
自己観	3.41	2.29		
他者観	3.60	-1.14		
(3) 母親の養育態度に対する子どもの認知				
PBI	金政 (2007)	本研究	p値	
ケア	3.11	2.48	<1%	
過保護	2.19	2.63	<1%	

(5) アタッチメント対象／アタッチメント関係の機能 WHO-TOR (表6)において、親あるいはピアが回答された割合を、先行研究と本研究とで比較した(表7)。その結果、ひきこもり経験者は、「現在」においては、それほど顕著ではないが、「就職活動中」、「ひきこもり時」、「進学時」において、ピアがアタッチメント対象として回答されないという特徴があることが示唆された。

また、彼らに特徴的な回答は、「いない」であり、現在=0~33%、就職活動中=20~60%、ひきこもり時=43~71%、進学時=43~71%であった。そして、「ひきこもり時に、あなたがいつも頼りにしている人は誰でしたか?」という問い(表6のSB2)に対して、「金銭的には親」という回答をした者が7名中3名いた(全体の43%)。これらのことから、彼らが社会への移行場面における課題を誰にも頼らず独力で解決しようとしている姿が伺える。

なお、「アドバイスを最も当てにしている人は誰ですか」(表6のSH2)という問いに対しては「進学時」では2名が、ひきこもり時では1名の計3名が「先生」と回答していた。このことから、社会への移行場面においては、家族外の関係性が一定の役割を担っている可能性が示唆された。

表6 WHO-TOR 尺度 (Fraley & Davis, 1997; 中尾訳, 2007)

近接性探索機能 (Proximity-seeking function)	
PS1: 最も一緒に時間を過ごしたい人は誰ですか。	
PS2: 最も離れたくない人は誰ですか。	
-----	
確実な避難所機能 (Safe-haven function)	
SH1: 気持ちが動揺したり落ち込んだとき、最も一緒にいたい人は誰ですか。	
SH2: アドバイスを最も当てにしている人は誰ですか。	
-----	
安全基地機能 (Secure-base function)	
SB1: 何か良いことを達成したとき、一番最初に伝えたい人は誰ですか。	
SB2: あなたがいつも頼りにしている人は誰ですか。	

アタッチメント理論の視点からは、主要なアタッチメント対象がいるかどうかということが重視される。だが、就職や進学という社会とのつながりが増える場面においては、家族内におけるアタッチメント関係の有無というよりも、家族外のアタッチメント関係(e.g., ピア)の有無が重要なものかもしれない。そして、この解釈は、「ひきこもり治療においては、「家族以外の親密な対人関係」がきわめて大きな意味を持つ」という斎藤(2005)の見解とも一致する。

以上の結果をまとめると、本研究で得られた知見は、次のようになる。すなわち、図1の不活発層のニート(ひきこもり)は、(1)親密性を回避する傾向と、母親の養育態度を、過保護であるが、ケア(温かさ、共感、など)

表7 WHO-TOR 尺度において親あるいはピアが回答された割合(先行研究と本研究の比較、表中の数字は%)<sup>1)</sup>

	Fraley & Davis (1997)		中尾 (2008)		現在		就職活動中 (N=5)		ひきこもり時		進学時	
	家族	ピア	家族	ピア	家族	ピア	家族	ピア	家族	ピア	家族	ピア
近接性探索												
PS1	14	86	12	86	14	57						
PS2	30	70	28	71	29	29						
-----												
確実な避難所												
SH1	19	81	17	83	29	29	40	0	29	0	29	0
SH2	46	54	33	63	29	0	20	20	43	0	14	0
-----												
安全基地												
SB1	58	42	63	44	71	29	80	0	43	0	57	0
SB2	62	38	62	38	57	0	20	0	57	0	14	0

<sup>1)</sup> PS、SH、SBの表記は表6と同じである。また、「就職活動中」については、就職活動やアルバイト探しを行ったことのない2名を除いて分析を行った。また、中尾(2008)は、先に述べた大学・専門学校一年生120名を対象とした調査の一部である。

の要素は必ずしも多くないと認知していた(表5)、(2)彼らの仕事に対する語りの内容は、大学生のそれと大きな違いがなかった(表1、表2)。つまり、何か異常があるからひきこもるのではなく、普通の人が普通にひきこもっていることに、この問題を解決することの難しさが潜んでいるのかもしれない。(3)ひきこもり経験者においては、ピアがアタッチメント対象としてあまり機能していなかった(表3、表7)。ひきこもり経験者と大学生における母親へのアタッチメントの安定性との間には有意差がないこと(表5)を踏まえるならば、社会とのつながりが増える場面では、家族内のアタッチメント関係というよりは、家族外のアタッチメント関係(ピア、先生)が重要な役割を担う可能性があることが示唆された。友達は作ってあげられるものではなく、自分で作るものであるという点にも、もしかしたら、不活発層のニート(ひきこもり)の問題の難しさが潜んでいるのかもしれない。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

- ① 中尾達馬 (2010. 11. 20). 面識があまりなくとも、他者の愛着スタイルを認識することは可能なのか?—愛着スタイル尺度における自己評定と他者評定の一致度の検討— パーソナリティ研究, 査読有, **19**, 146-156.

[学会発表] (計4件)

- ① 中尾達馬 (2010. 9. 22). 社会的ひきこもり経験者における愛着の諸特徴 日本心理学会第74回大会発表論文

- 集, 214. 大阪大学豊中キャンパス
- ② 中尾達馬 (2010. 11. 7). 社会的ひきこもり経験者が語る将来, 就職, 不安についての内容分析 九州心理学会第 71 回大会発表論文集, 55. 長崎大学文教キャンパス
- ③ 中尾達馬・三沢 良 (2009. 8. 28). 愛着スタイル尺度における自己評定と他者評定の不一致が適応へ及ぼす影響 日本心理学会第 73 回大会発表論文集, 1179. 立命館大学衣笠キャンパス
- ④ 中尾達馬・三沢 良 (2008. 11. 9). 愛着スタイル尺度における自己評定と他者評定の一致度の検討 九州心理学会第 69 回大会発表論文集, 41. 北九州市立大学北方キャンパス

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

中尾 達馬 (NAKAO TATSUMA)  
琉球大学・教育学部・准教授  
研究者番号: 40380662

### (2) 研究分担者

若手研究 (B) のため、なし ( )  
研究者番号:

### (3) 連携研究者

若手研究 (B) のため、なし ( )  
研究者番号: